

片倉生命の慶福養老保険―戦前の生命保険商品のネーミング (3)―

日本の産業化の一翼を担った産業に製糸業がある。富岡の官営製糸工場の設立がその象徴。生糸および絹織物の輸出が果たした外貨獲得は、日本経済がテイクオフする際の燃料として貢献した。製糸会社は数多くあったが、なかでも片倉組（大正9年に改組して片倉製絲紡績株式会社）は製糸業を中核事業として財をなした一大勢力であった。

いわゆる片倉財閥は、大正10年に生命保険会社を設立して、生命保険業に参入した。さらに大正11年に小樽貨物火災（明治30年5月設立）を買収し損害保険業にも参入した。同社は、富国火災と改称して再出発することになった。掲載した片倉生命の「保険案内」には、「火災保険は姉妹会社たる富国火災へ」という文言があり、生命保険と火災保険のクロスセルを試みていた（掲載図1）。

損保会社を姉妹会社としたタイミングは、けっして良いものとはいえなかった。翌年に関東大震災がおこったからである。震災後、火災保険契約は、約款上は地震リスク免責規定があったにもかかわらず、震火災見舞金を支払わざるをえなかった。この支払により東京海上と新規営業の会社を除くすべての損害保険会社は、欠損状態に陥り、それを政府からの借入金によって補うことになった。皮肉にも、震災後、個人所有の物件に対する火災保険需要が大きくなったことを考えると、片倉製絲が震災後の火災保険市場に参入していたら、その資本をバックに火災保険市場でかなり良いポジションを得られたはずである。

生保に関しては、死亡リスクは十分に分散されており、大震災による死亡者が経営を危うくすることはなかった。片倉生命は、むしろ設立まもなく急成長を遂げた。当時の保険ジャーナリスト稲見泰治によれば、「此の会社程創立の新しい割合に出世の早い会社はこれまでに」なく、設立約5年で「既に多数の先輩会社を追いのけて、同業者中軸」となった（稲見泰治『保険はどこへ』文雅堂書店、1926年）。大正期末には当時現存する保有契約ベースで、生保44社中21位であった。この急成長については、掲載した図にはっきりと示されている（掲載図2）。ちなみに急成長の順位は、片倉、東海、医師共済、八千代、戦友共済、大正、千代田、太平、大同、日華の順である。千代田や大同を除けば、必ずしも堅固な財政基盤を確立した会社ばかりでないのが興味深い。

急成長の理由は、製糸関連のネットワークを活用したことによる。社長の今井五介、専務の片倉精一以下、役員はすべて片倉製絲関係の者であった。彼らは、「全国に設置してある繭買入所を利用すると共に、自己勢力圏内の製絲工場に於る男女から繭を喰い破って出る蠶蛾の果てに至るまでを加入させると云うのであるから、契約高は幾らでも」（稲見『同上書』）増大するようにみえた。掲載した片倉生命の販促漫画の主人公には、養蚕家が登場する。この漫画については、以前の連載記事で紹介しているので詳しくは触れないが、保険を積極的に活用する養蚕家の金井安全（かなみ・あんぜん）さんと、保険に見向きもしない隣家の崎野明内（さきの・めいない）さんの行く末を対比的に描く漫画である（掲載図3）。まさに戦前の保険募集用漫画の定番ストーリーである。

「我社の系統と其の事業」というパンフレットから、片倉の関連企業をみると、片倉製絲紡績株式会社が主力の主力の現業会社である。同社は昭和2年現在で5,275万円とグループ最大の資本金を有している。その沿革は、「大正9年3月片倉組の経営に係る製絲紡績事業を継承し、同年武井覚太郎、田中新之助の所有工場を合併して、次で小城郡是、高知長岡(ママ)、鴨島の各製絲所を買収、大正12年株式会社小澤組を合併して以て今日に至る」とある。片倉生命を除く「系統」会社は以下の通り。片倉合名会社(資本金900万円)は、同族の中核会社。続いて、片倉殖産株式会社(同150万円)、富国火災海上保険株式会社(同200万円)、日東紡績株式会社(同500万円)、日華蠶絲株式会社(同150万円)、薩摩製絲株式会社(同500万円)、長崎製絲株式会社(同200万円)、片倉米穀肥料株式会社(同80万円)、高岡製絲所、片倉江津製絲株式会社(同100万円)、備作製絲株式会社(同250万円)、佐越製絲株式会社(大正15年に経営を受託)、武州製絲株式会社(同100万円)、満州蠶絲株式会社(同100万円)、片倉越後製絲株式会社(同100万円)、松江片倉製絲株式会社(同200万円)。掲載の事業所等の地図も参照されたい(掲載図4)。

今回は、商品のネーミングの話題が後回しとなってしまった。現代の生命保険商品のネーミングを少しあげてみよう。「みらいのカタチ」「1 UP Vitality」「ベスト+スタイル」「ジャスト」「保険王 plus」など、共済では「たすけあい」「あいぶらす」などがある。他方、保障機能や保険商品種目名を用い、あえてネーミングを多用しない会社や共済団体もある。現代生保商品のネーミングと比べると、戦前の生命保険商品のネーミングには「おめでたい漢字」が使われることが多い。「福」は、おめでたい漢字の代表だが、ネーミングによく使われた。ところで、中華料理店で、赤い紙に書かれた「福」がひっくり返っていることがある。これは「福がひっくり返る」という中国語「フクタオ」が、「福来る」と同じ意味なので、わざわざひっくり返すようだ。(知らなかったのは、私だけかもしれないが。)

片倉生命は、この「福」に「慶び」が加わった「慶福養老保険」を発売した。広辞苑によれば、慶福とは「めでたいこと。幸い」とあるので、盆と正月が一緒に来たような目出度さをともなった養老保険ということになる。保険案内に次のような説明がある(掲載図5)。

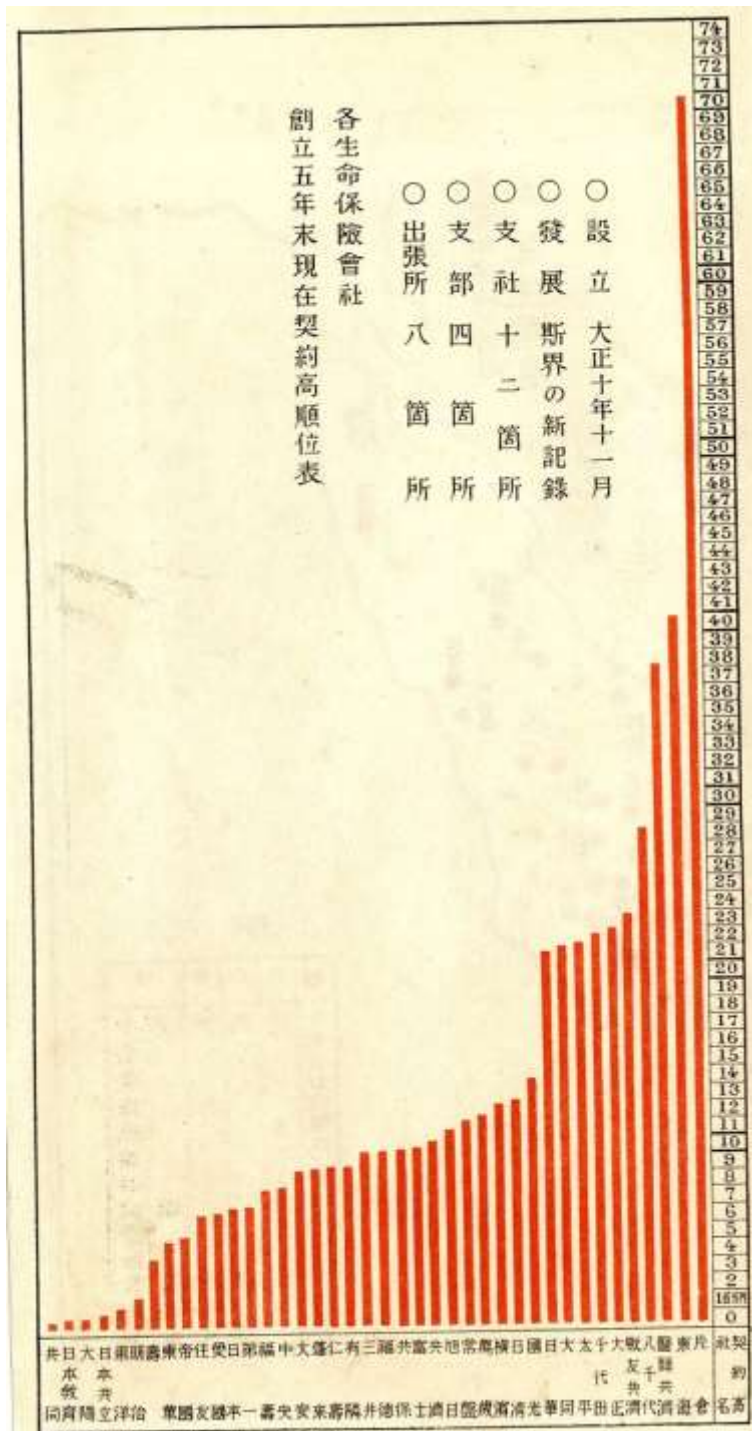
「此保険は時代に適応した頗る有利で且つ趣味あるものであります。契約が満期となった時は保険金の外に五割の割増金を御支払致します。」要するに、「慶福」とは、保険金額の五割の割増保険金のことである。たしかに保険契約者は、死亡保険金の1.5倍の満期保険金をもらえるため魅力的に見える。しかしながら、割増保険金のためには相応の保険料が必要なので、結局のところ「慶福」という割増保険金部分は、(死亡した契約者の権利を生存者に移転する、いわゆるトンチン性を高めない限り)基本的には自分の貯蓄保険料から生み出さなければならない。実際に年払保険料率表をみれば、保険料が相当割高であり、割増保険金の貯蓄保険料が含まれているのは明らかだ。こうしてみると、「慶福養老保険」が「時代に適応した頗る有利」という表現は、根拠のない表現である。もっとも大正末期から募集パンフレットは商工省届出が必要となったが、それでも現代の募集規制の視点から見れば、相当不適切な表現が多く、この程度では悪質なものとまではいえないほどだ。

保険毎日新聞「みちくさ保険物語」101

最後に、片倉生命が保険料払込みのリマインドのために契約者に出した絵葉書の画像を掲載した。母と子が笑顔で保険会社に保険料を払いにいくところのようだ。やや父権主義的な解釈かもしれないが、家族（母子）が健康で円満だというのが、今も昔も「慶福」ということか。（掲載図6）。



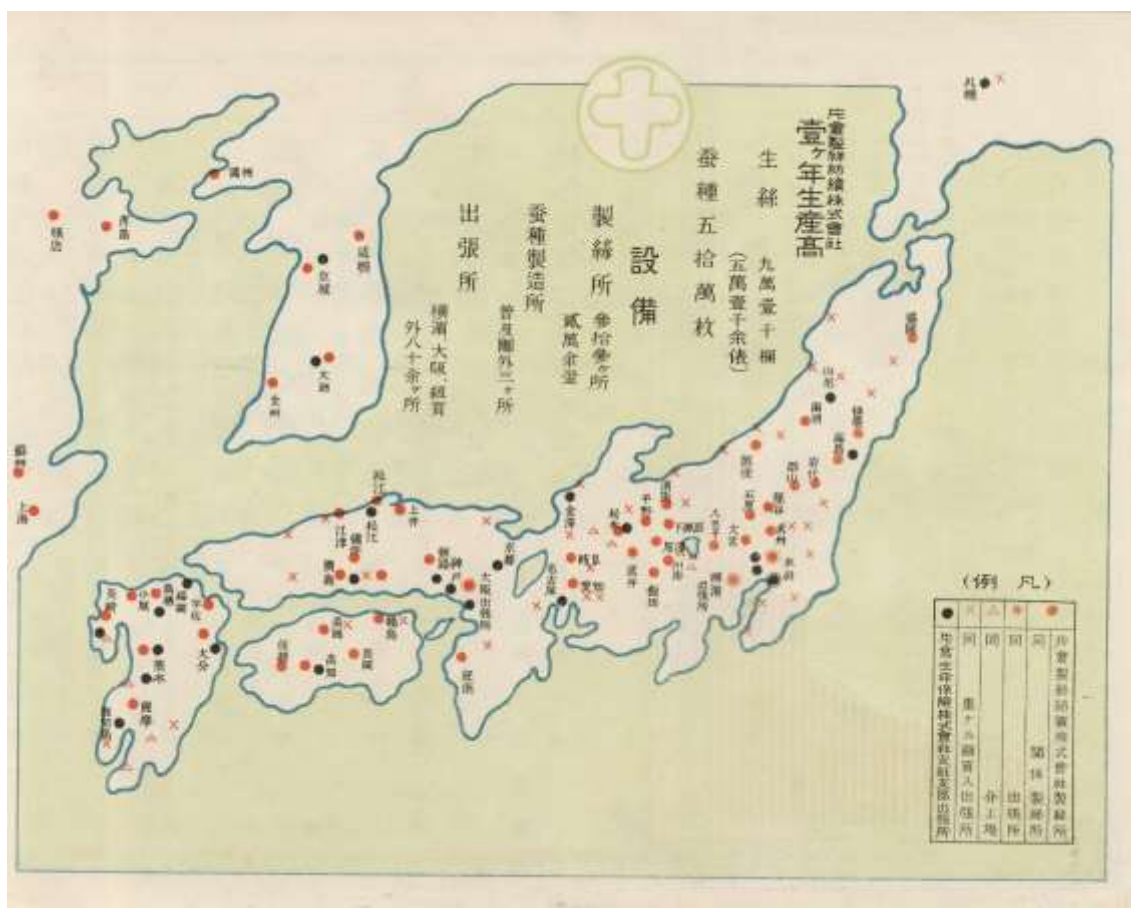
「火災保険は姉妹会社たる富国火災へ」「保険案内（一部）」昭和4年



創立後5年目の保有契約高の順位「我社の系統と其の事業」(一部)昭和2年頃



片倉生命の販促漫画（一部）



片倉の全国ネットワーク「我社の系統と其の事業」(一部)、昭和2年頃。



片倉生命「保険案内、慶福」の表紙



片倉生命「保険料払込請求はがき」昭和5年